濡乾茜逢傘

初編

へ13
2378
220

遠73特
2378
320

濡乾茜逸傘自序

心の駒走ると早く心の猿惑ふ支多き故以て意馬心猿の心を戒花見ふ往さ咄をもれば ぞうやう花ゞ目ふちらゝ紅火鉢ふ少ー煙ゞ見ゆきば丁稚ゞ薩摩芋ゞやしれんと気の廻るい意の駒と心の猿の仕業ゝ妄執とゝひ迷ひとゝゝ皆此境界を不遁富貴を不羨貧賤をあるべゝ善悪不二と見る時ゝ迷もるゝ悟もるゝと此草紙ゝ善人だゝり打寄て互ゝ実意を尽せども兎の毛で突さ迷の一ッで彼も迷是も迷一條乃雑談咄彼心猿の夫るゝで三本不足作者の猿智恵心の駒ゝ勇むるる春の遊の御伽草紙春雨の眠ゝ一助ゆもるゝば作者の幸るゝん

干時嘉永四年辛亥初春新版

玉塵園雪住誌

笠屋三勝
茜屋半七
ちく花のあみ紙ぐりを

本朝網五郎
玉蕊園

玉杉園
琴佳
あつまや
茜屋
佐七
女房
於糸

春山
嘉壽見

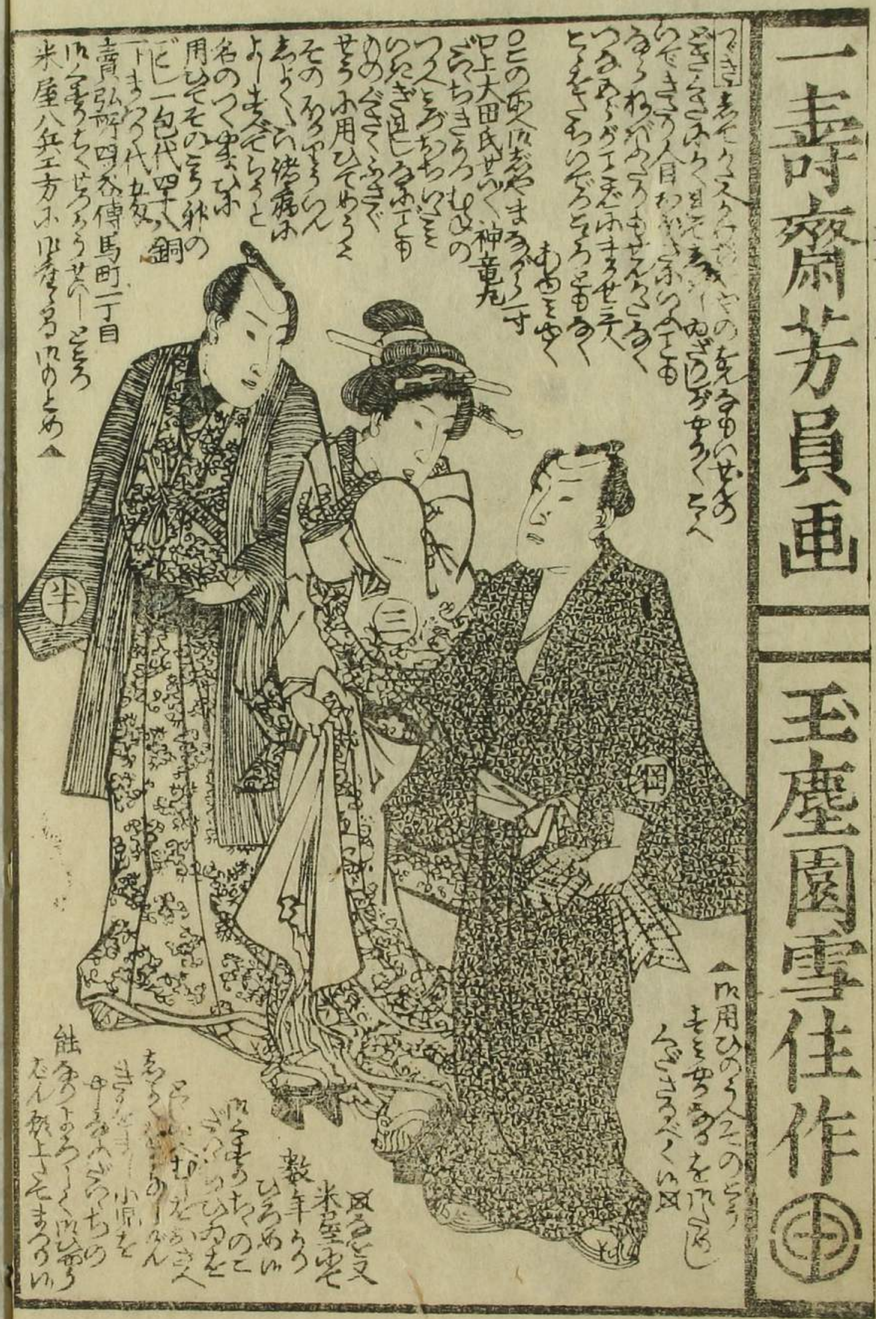
あるあるいろも

三

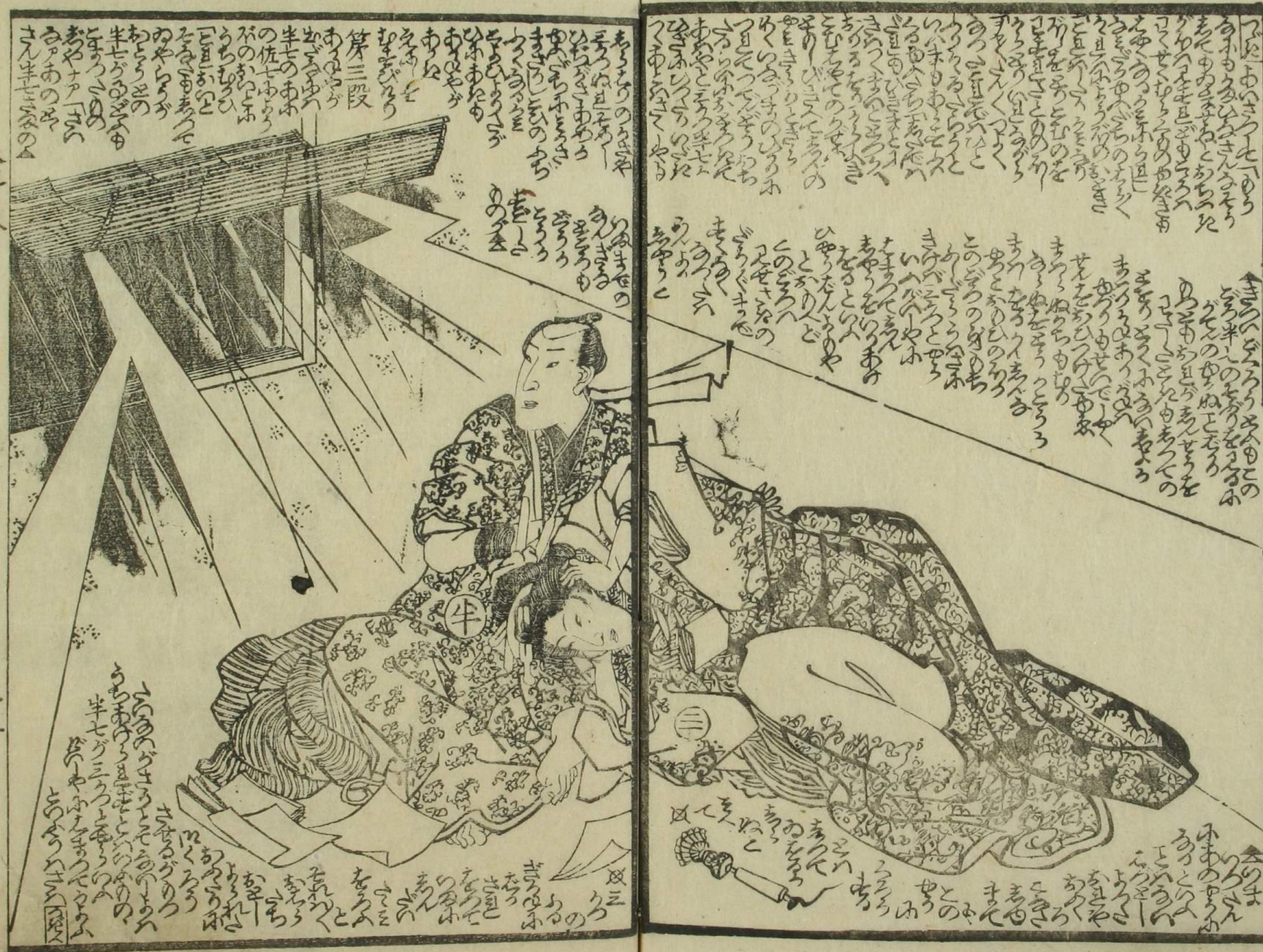
半

一壽齋芳員画

玉塵園雪住作



玉塵園雪住作
一壽齋芳員画



第三段

三ろ
平七
あいと
佐七

玉塵園雪住作
一壽齋芳員画